

インターハイの報告を載せます。上島氏は今回日本バスケットボール協会の理事に就任され、現在多忙中にもかかわらず、時間を割いてインターハイにおける山の手高校の戦略について紹介してくれました。参考になることが多いと思われます。

「一寸一言」インターハイを終えて

日本バスケットボール協会理事 上島 正光

昨年のウィンターカップ「一寸一言」について、「一寸一言」ではない、見出しの言葉に反して長過ぎて、くどいというご意見が寄せられましたので今回は出来るだけ要点を絞り、できうるかぎり簡潔に努めるようにしたいと思います。文筆の才なく、上手くまとめることは、適いませんこととお断りして報告したいと思います。

昨年のウィンターカップの報告時に高校女子の20年度の展望は、桜花学園高と東京成徳高が中心に、他校がこの2校にどう挑むかと言うことを述べましたが、予想通り長身選手でしかも能力の高い大型チームの両校の決勝となり、桜花学園高が昨年に続き優勝しました。

今年のインターハイでは、小型チームの健闘が特筆される試合が多くありました。

第1に、石川県の県立津幡高（最長身者170cm2人、他は全部170cm未満）が1回戦で、福岡の中村学園高（189cm、182cm、179cm）を破り、その勢いで東京2位の明星学園（186cm、184cm＝中国）も破って準々決勝まで進みました。

大分県の県立中津北高（177cm、他は167cm以下）も3回戦で東京1位の東京成徳高（184cm、183cm、180cm）相手に第4ピリオド終盤に2点差まで追いつき、流れは、中津北高に向いて、あわやと言う試合運びで会場を沸かせる試合内容でした。

また、静岡県の常葉学園高（180cmの中国人はいるが、他は170cm以下）が宮城県の明成高（195cm、192cmともに中国）に勝利しております。また、宮崎県の県立小林高が1回戦で神奈川県の高沢総合高を、大阪の樟蔭東高（センター171cm）が1回戦で東京3位の実践学園高を破るなど、小さなチームの奮闘振りが見られました。

これらのチームに共通して言えることは、オフェンスの組み立てがしっかりしていることと、当然のことながらボールに対する執着心が勝っていることにほかなりません。

山の手高も岩手インターハイ1回戦で津幡高に、熊本インターハイ準決勝では、地元国府高に身長差では圧倒的に優位な立場にありながら完敗し苦い思いをしたことがあります。この2試合とも、相手の早いオフェンスに翻弄され、リバウンドも取られ走られて負けております。

今までの経験から大きな選手が揃っていなければ、勝てないと言うことは、決してないと断言できます。

小さなチームでも工夫次第では、いくらでも、勝負できるチームを構築することは可能だと思います。

昨年に続いて、今年も山の手高は、長身者不在のチームです。ポストプレーヤー平野（170cm）が中心のチームではありますが、インターハイ3試合ともチームとしてリバウンドでは全て相手チームに勝っております。

今年のインターハイでは、勝ち進んでいけば、準々決勝で対戦する桜花学園高と如何に戦うかを目標に長身者対策としてのインサイドヘルプディフェンスを中心に①ノーマルマンツーマン②センターラインのスタント③3クォーターからのゾーンプレス④ドロップゾーンディフェンスを用意して試合に臨みました。

試合前、富士通にて合宿を実施。インターハイ出場5チームと練習試合を行い①センタープレーヤーを3年の栃本か2年の千田にするか ②ポストのヘルプディフェンス ③相手シューターにはオフボールのときフェイスガードに近いタイトディフェンス等を試みながら練習試合を行った結果、②と③については良い感触を得ることができ、本番に備えることができました。

①については、道予選では得点力が上の千田を起用したが、リバウンドでは栃本の方が強く、全道大会以降は栃本をスタメンにしておりました。経験が浅く全国大会では使えるか半信半疑でしたが、この合宿の結果スタメン

で使えるめどがつかしました。

試合当日、宿舎近くの体育館を借りて午前9時から、対浜松開誠館戦に備えて、1時間の練習を行う。相手チームの特徴は、オフェンス面では①1・2・2アライメントから②ポイントガード、No4が中心で、ドリブルを多用しキックアウトからのアシスト、ヘジテーションからのペネトレート③No4とセンターNo5のハイピック④アウトサイドポストを利用したスクリーン（ピック、アラウンド）⑤ポストへのフィードパスはウイングから⑥シュートタイミングが早い。

ディフェンス面では、①マンツーマンを主体に②インゴール後3クォーターからの2・2・1ゾーンプレスを敷きハーフでは2・1・2のゾーンとマンツーマンを併用③ファールが多い。

以上の相手チームに備えて、①ピックアップを早くする②ポストのディフェンス
③No4にフェイスガード④No5へのボックスアウト⑤スクリーンに対するディフェンスには、ファイティングスルー⑥2・1・2ゾーンには1・3・1アライメントからハイ・ローポスト、シャロードリブル、ギャップアタック等⑦ゾーンプレスには1・2・2アライメントからテールのフラッシュを確認する。

浜松開成誠館高との1回戦は、3ポイントシュートを多用してくることは予想していたが、チャンスがあればシュートタイミングに関係なく打ってきまし

た。第2クォーターにスクリーナフォースクリーンプレー（スイッチすることなく対応）を使用したぐらいで、最初からハイピックを中心に空いたら3ポイントシュートをうち続け、終わって見たら42本打たれました。成功は14本で64点中42点が3ポイントの得点でした。ポストで得点を取られたのは3本程度とインサイドのディフェンスは成功していましたが、3ポイントのチェックが課題として残りました。

続く2回戦は、地元浦和西高との対戦となりましたが、ミーティングと試合当日の1時間練習で①2・1・2ゾーンの攻略②ファールが多いのでポンプフェイクでファールを誘うプレーの確認③No.8最長身者（175cm）だがミドルレンジのシュートが得意なのでタイトディフェンスをすることを確認して試合に臨む。

開始連続2ゴールを許すも第1ピリオド小山の12得点により20対10で終える。第2クォーター以降、浦和西高は広い2・1・2ゾーンとマンツーマンディフェンスを併用、相手ディフェンスによってと言うより不注意なパスミス等が多く、なかなかペースを掴みきれず、第3ピリオド7分に5点差まで縮められ、タイムアウトをとる。タイムアウト後、山田の連続2本の3ポイントで再び2桁の点差となり、そのまま第4ピリオドも点差は変わらず83対69で試合を終える。

この試合では、山の手チームファール5、浦和西23で、フリースロー19得点、リバウンドで山の手52浦和西37と、この差が勝敗を左右したものであると思います。

3回戦の樟蔭東高は、山の手高と同様ビックセンターはいないが171cmセンターのハイポストからの右ドライブ②N o 4のシュート③パワフルなディフェンスをするのでファールが多いなど、山の手高校としては①N o 10センターのボールの貰いさまのペネトレートに対してアジャストを早く②激しいディフェンスをするので積極的に攻めてファールを誘う③オフェンスはハイ・ローポストを使うことを確認して試合に臨むこととしました。

第1ピリオドはポストを中心に20点のうち15点をポストプレーヤーが得点するも、22点の失点を許す。

第2ピリオドは一時8点離されるが、35対38の3点ビハインドで前半を終える。

第3ピリオド残り3分に48対47とこの試合初めてリードするが、その後一進一退が続き、54対55の1点差で第4ピリオドを迎えることとなった。

7分46秒には平野のポストプレーで62対57と、この試合最大の得点差となり樟蔭東高タイムアウト。

この後、樟蔭東高は2・2・1のゾーンプレスから3・2のゾーンに変える。残り3分に62対63と逆転されたが2分21秒には再び小山のシュートで64対63とリードする。

樟蔭東高タイムアウト。この後パスミスからブレイクを出されて再び64対65とリードされる。1分47秒山の手高タイムアウト。

その後パスミスやシュートミスが続き得点できず、残り48秒にタイムアウトを取りプレスディフェンスとペネトレートを指示。

今が残り8.6秒でペネトレートからファールされフリースロー得る。ここで

樟蔭東高タイムアウト。このときフリースローに対して意識させぬよう、延長になれば相手センターがファールアウトしているのも山の手高有利であることのみを告げてコートに送り出した。

しかし2本ともリングに嫌われ1点差で敗れた。フリースローを外した本人は、かなり責任を感じ落胆しておりましたが、2年生でありながら先輩を頼らず勇気を持って果敢に勝負に行ったことは、今後に期待できると思っております。

この試合でのフリースローの確立は7/16(43.8%)と、接戦での試合ではフリースローが重要な要素であることを思い知らされました。

この試合でのポイントとして、樟蔭東高として5点ビハインドのときにタイムアウトを取り、プレスディフェンスで、ゾーンディフェンスに切り替え流れを変えたことと、山の手高のフリースロー時にタイムアウトを取り、シューターにプレッシャーを与える作戦はさすがである。反対に自分達の持ち味であるプレスディフェンスを何回か試みる機会があり、特に5点リードして相手がタイムアウトを取った直後が、仕掛ける最も有効なときではなかったか、終わってみて思い巡らせております。

競って負けるのは指導者の責任と言われますが、今回の樟蔭東高戦は、まさに言い得ていると思えます。

指導者の洞察力、決断力が普段の練習時に於いても大切なことは当然ですが、試合の時ほど大きく左右されることは自分も幾度と無く経験しております。

特にタイムアウトを取るタイミングとディフェンスの変更は試合の方向性を

決める重要なファクターとなります。今回も私の判断が影響した結果だと反省しております。

このように「一寸一言」の材料にはこれからも常に失敗の方で皆様方にお役に立てる情報提供ができると思います。

今回の大会で指導者がという試合がありましたので紹介します。

1つ目は1回戦で、試合終了後に3ポイントシュートが決まり2点差で逆転勝利。レフェリー、オフィシャルそして、負けたチームから抗議もせず、観客だけが知っていたゲーム。

2つ目は、2回戦で第4ピリオド20点差を追い上げられて30秒を切っても8点差をつけていたが守りきれず、まさかの1点差の大逆転の試合がありました。

試合は何が起こるか分かりません。皆様方くれぐれもご用心を。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会